慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカ産業資本の形成 : 鉄工業の性格と系譜
Sub Title	Formation of industrial capital in the United States : genealogy of the iron manufactures
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.7/8 (1949. 8) ,p.430(60)- 459(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19490801-0060
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490801-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Edwards, Jefferson and Agriculture, 1948, pp. 79—81 にも出てゐる。)

外國大使や大統領等と多忙な公職生活を送つた彼が以上の如く農業の殆んど全分野に亙つて顯著な活躍をしたことは、正に驚嘆に値する。然し彼も決して時代の風潮と遊離した存在ではなかつた。ここに彼の時代のアメリカ及び密接な關係にあつた當時の英國の社會的風潮について言及しよう。

當時の英國では、農藝趣味が一種の流行となつてゐた。卽ち貴顯紳士や富裕な階級の人々が、色々新しい農業上園藝上の試驗を行つたりして大いに農業に關心を示してゐた。かくの如き、指導者階級の農藝趣味に刺戟され、たとへ狹小なものでも菜園をもつてゐる一般庶民階級の間に農藝趣味が普及してゐた。他方アメリカに於いても、獨立戰爭終了後一般の人々の關心は「劍から犂」へと轉じ、富裕階級も英國の影響で等しく農業に關心を抱いてゐた。當時アメリカ人殊に識者や富裕階級は未だ英國に對する植民地的劣等感(コンプレックス)から脫却し得ず、英國のものは何でも優れたものとして模倣する傾向が强かつた。これはフランスの社會心理學者ガブリエル・タルドの所謂「優勝模倣」である。ジェファスンも英國に於ける農業改良奬勵會のアメリカに於ける名譽會員の一人として、この會を主宰してゐたアァサァ・ヤング等の優れた英國農業家と屢〻文通し、英國の優れた技術等の紹介に務めたジェファスン以外の英國農業奬勵會のアメリカに於ける他の六名の名譽會員 honorary members の氏名は、次の如くであつた。曰く George Washington, Jhon Adams, John Jay, Rufus King, Dr. Enoch Edwards, William West. 卽ちこれから推しても、ワシントンを始め他の諸大統領や學者等當時のアメリカ指導者階級が如何に農業に關心を抱いてゐたかが明かであらう。(これは英國王立農業協會圖書館發行小册子一六四號中の農業改良奬勵會々員名簿による。尙本稿はそれを R. C. Loehr, The Influence of English Agriculture on American Agriculture, 1775—1825, in "Agricultural History," 11: 3—15 (January. 1937) より引用した。)

ジェファスンが農業に對し如何に深い愛着を有してゐたかは、彼が大統領就任後も常に自己の職業を「農夫」farmer と書いてゐたことからも明かである(詳細は D Malone, "Thomas Jefferson," in Dictionary of American Biography, 10: 17—9 を參照)彼は正にアメリカ建國期に於ける典型的な紳農であり「アメリカ農業の父」と稱さるべきであらう。

アメリカ產業資本の形成

——鐵工業の性格と系譜——

中村勝己

「かかる製造業は農業の末裔である。」
——アダム・スミス　國富論
キャナン版三八三頁——

一

我々が資本主義發達史を研究する場合、先づ問題となるのは、資本主義とは何であるかといふ事である。この點について、學者の見解は二つに大別出來ると思はれる(1)。その一は之を近代に特有な現象と考へ、從つて資本主義發達史の研究とは、特殊近代的な社會經濟構造の成立過程を探る事であるとする(2)に對し、他は資本主義を「營利」乃至「利潤追求」一般と考へ、從つて古代資本主義とか中世資本主義と呼ばれるものを考へるのである(3)。確かにかゝる意味のいはゞ類型的現象としての「資本主義」＝「營利」＝「利潤追求」は歷史の何れの時代にも存在した。「『資本主義』は支那、インド、バビロンにも、古代にも中世にも存在してゐた(4)。」「其は實際、歷史的に最も古くから存在してゐるところの、資本の自由な存在樣式なのである(5)。」併し、かゝる「營利」も歷史的にはその性格を異にしてゐた(6)。それ故に、我我は近代以前の資本の存在形態を「前期的資本」と呼び、近代の其を「產業資本」と呼びたい。而して後者が前者と異る所以は、其が流通行程に活動の主なる場面を見出すに非ずして、特に生產力の基盤の上に立つ營利、換言すれば、自らの中に生產行程を含む營利である點である。

かくて近代の資本主義を特徴づけるものは其の尨大な生産力であり、かゝる性格の資本が「産業資本」であつたのである。從つて資本主義發達史とは、産業資本の形成を指標とする社會の一過程を意味する。かくて産業資本は、資本家が賃銀勞働者の勞働力を商品として買ひ、之を一ケ所に集めて、協業によつて、商品を生産する過程をその循環の基礎過程とする資本である。この樣な産業資本を中心として生産し消費する經濟構造を資本主義と呼ぶならば、資本主義は正しく特殊近代的な歴史的現象＝「歴史的個體」であり、從つて資本主義發達史とは、かかる社會經濟構造の發生、成長過程である譯である。

扨、然らばかゝる性格の「産業資本」は、彼の「前期的資本」に由來するものであるか、又は之とは全然異つた系譜をもつものであるか。かゝる問に對して、我國に於ける最近の比較經濟史的研究の成果によれば、略〻次の如く結論されてゐる。即ち、西歐（アメリカを含めて）に於ては、かゝる資本の擡ひ手即ち産業資本家は、「前期的資本」の末裔ではなく、寧ろ半農半工の農村の小生産者（其は「前期的資本」と對抗しつゝ勃興して來たものであるが）に由來するのである。この事は大塚久雄教授により、イギリスに就て實證されたものであるが、教授は、又「アメリカ合衆國を始め西歐諸國に於ても、基本的には全く同一の史實を見出すであらう(7)」（傍點引用者）とされてゐる。即ち、アメリカ合衆國に於ては、産業資本の系譜は、かの前期的資本――商業資本及高利貸資本――にではなく、寧ろ「中産的生産者層」――農村の半農半工の小生産者及び都市の小親方――に求むべきであるといふのである。

(1) 以下の行論については大塚久雄教授著「近代化の歴史的起點」所收の「資本主義發達史の基礎視點」に多く負ふ。倘本論文の問題の提起の仕方については、同書所收「近代化の歴史的起點」なる論文參照。

(2) 「いふ迄もなく、こゝに資本主義とは西洋（Okzident）に特有な近代の合理的企業のそれであつて、支那、インド、バビロン、ヘラス、ロマ、フィレンツェから現代に至るまで、三千年間世界に擯まつてゐるところの、高利貸、戰爭請負業者、官職ならびに租稅の請負業者、大商人、大金融業者による資本主義ではない。」（マックス・ウェーバー、梶山力譯「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」五一頁）

(3) 例へば、ブレンターノ、田中善治郎譯「近世資本主義の起源」所收の諸論文參照。

(4) ウェーバー、前掲邦譯書二八頁。

(5) マルクス資本論、高畠譯、第四册二八三――四頁。

(6) 「しかし後に見るやうに、これらの資本主義は、右に述べた特殊の倫理的性格を缺如してゐたのである。」（ウェーバー、前掲邦譯書二八頁）

(7) 大塚教授、前掲書七二頁。

二

資本主義の系譜に關して、アメリカ合衆國に於ては、イギリスと「或る點でニュアンスを異にしながら基本的には事情は全く同一である(1)」といふ結論がこゝに一應出されたわけである。

扨、かゝる見解がアメリカについて容認される爲には、アメリカに於ける史實によつて實證されねばならぬ事は申す迄もない。問題は次の如くである。――アメリカ資本主義は、獨立自營農民や小生産者等の所謂中産的生産者層によつて擔はれたのであるか、或は然らずして、前期的資本――商業資本、高利貸資本――が範疇的に轉化して、近代的な産業資本となつたのであるか。ヨリ具體的に云へば、北部の商業資本――といふのは南部の其は問題とならないからである。――が、アメリカ資本主義の發達に何らかの役割を果して居たのではないかといふ事である。

元來、南部及中部植民地は、多く封建的貴族と結合した商業資本家＝冒險商人によつて開拓されたものであり、中部では主に麥類、南部では煙草、藍、米、後には棉花が、契約奉公人、後には黑奴の勞働によつて栽培されてゐた、プランテーションを主とし、かゝる契約奉公人の輸送、奴隸貿易、土地投機と結合した、極めて前期的性格の強い經營が行はれて居て、かゝる商業資本が近代的産業資本に轉化する事はなかつたのである。

然るに、北部の商業資本については、事情は異る。北部植民地＝ニュー・イングランドは、元來「牧師（ティーチャー）と得業士（クラーク）とを主とし、小市民、手工業者　自作農（ヨーマン）民との結合のもとに宗教的理由から創立された(2)」のであつたが、その自然的條件――地味、氣候、森林及海洋の存在等は、その住民を次第に農業から漁業、造船業、貿易・海運業に向はしめ、彼らは南部植民地をも商業的に支配するに至つた。私は今は、この三角貿易、密貿易による北部海岸諸都市の繁榮と、そこに於ける莫大な富の蓄積、而して西部フロンティア社會と對遮的存在たる東部の「海岸社會」の形成――商業資本の支配――については、單に指摘するに止める。

獨立戰爭後の北部商業資本は、戰後の不安定期を經

て、一時繁榮したが、ナポレオン戰爭の影響を大きく受け、漸次その活動の舞臺を失ひ、商人はその資本を海上より引上げて、土地投機、道路、運河、銀行等に投じ始めた。就中、一八一二年の戰爭――正確には一八〇七年の出港停止令(その結果は眞に破壞的であつたと當時の旅行者は語つてゐる。(3))を機として、北部商業資本は急激に紡績業に投下され始めた。之については、我々は、ボストン商人ブラウンとサミュエル・スレイターによる、ポータケットの木棉工場を始め、多くの例を擧げる事が出來る(4)。但し、この工場も、織布工程は問屋制家内工業によつて行はれて居たもので、勞働力は農村の女・子供に仰いでゐた。近代的工場制度は木棉工場に於ては、ボストン貿易商ローウェル等によるウォルサム工場――紡績・織布兩工程を含む――に求めらるべき事は周知に屬する(5)。

以上の事實より、小原敬士教授は次の三點を指摘されて居る(6)。

(一)「アメリカにおける近代的資本の少くともある部分は、前期的商業資本の範疇的轉化によつて形成されたものである。」

(二)「アメリカに於ける前期的商業資本はイギリスやヨーロッパ大陸の場合のやうに封建的支配階級と結びついて際立つて保守反動的な役割を果したことはなかつたといふ點である。」

(三)「アメリカにおける前期的商業資本がどの程度まで近代的産業資本の中核となり、後者の形成のための主體的推進力となつたかについては、なほ研究の餘地が多いであらう。」

かくて小原教授は「しかし、われわれは敢て問はねばならない」とされて、ウェーバー、大塚的見解が「アメリカにおいて果してそのまゝに當嵌まるであらうか。云々」と強い疑問を提出され、「史實に卽して再吟味すること」を求められてゐる(7)。併し、兩教授の見解は共に問題提起の形であり、少くとも史實による實證の形では發表されてゐない。而してこの問題の解決は、彼の方法論爭のみに委ねらるべきではない。又、この何れかを結論として、その結論を實證する事であつては勿論ならない。我々は唯問題の所在をこゝに見出したに過ぎないのである。

以下に於て、私は鐵工業――其はアメリカ資本主義の鍵鑰産業である――について、その性格及系譜を尋ねる事によつて、この疑問に些かなりとも解答を與へたいと

思ふ。以下の敍述は、かゝる視角からなされたものであり、鐵工業一般や、その年代記ではない。從つてその限りのものである。

階つて置くが、本稿は比較經濟史研究の成果の妥當性を西歐に就て論ずるものでなく、その問題提起の仕方――産業資本の系譜の研究――に從つて、アメリカの研究をせんとするものである。從つて、アメリカ資本主義の發達を西歐に就ての成果の「寢床」へ押込むものでは決してないのである。

(1) 大塚教授「資本主義發達史の基礎視點」(前掲書所收七八頁)

(2) ウェーバー、前掲邦譯三五頁。

(3) Lambert, John, Travels through Canada and the United States of North America in the Years 1806, 1807, and 1808, vol. ii. p. 65

(4) この例については、East, R. A., Business Enterprise in the American Revolutionary Era. 1938 參照。

(5) クラークはウォルサム型工場に於ても、現物賃銀制と商業資本の支配する「工業的封建制」(Industrial Feudalism)を指摘してゐる。「Clark, History of Manufactures in the United States, 1929. vol. I. p.452) (社會經濟史學十四の一、五〇―一頁)

(6)「アメリカ經濟史における商業資本」(小原教授著「アメリカ資本主義の形成」所收論文九六―九八頁)

(7) 小原教授著、前掲書七六―七頁。

三

この時代(一八〇八年―一八六〇年―筆者)を通じて合衆國の工業の發展を齎して諸要因を、周到に認識し、理解する爲には、特殊の工業の中の若干の發展の跡を辿る事が必要であらう。そしてこの目的の爲に、棉工業及鐵工業が、最も重要なものとして撰擇されるのは尤な事である。とはボガートがアメリカ資本主義の發達を大づかみにした言葉であつた(1)。而して紡績業に就ては前にも若干觸れたが、之は獨立戰爭以前から廣汎に農村に家内工業的・副業的に行はれてゐたもので、自家用としてのみならず、廣く市場生産の段階に達して居た。併し近代的工場による生産は、一八〇八年を境として、商業資本と結付いて始められたものである。眼を轉じてアメリカ資本主義の他の脚である鐵工業を見ると、事情は異る。

植民地アメリカに於ける鐵工業は、周知の如く、十七世紀初頭に始まる。一六一〇年ヴァジニアに於て、豐富に産する鐵鑛石をジェイムズタウン植民地が英國に送つて、良質なる事が判明して注目を惹いた。一六二〇年頃

ロンドン會社がサセックスから約四〇人の職人を送り、ヴァジニアに一つの鐵工場を建てた。その前途は頗る有望で、次の復活節（一六二一年の春）迄には、大量の鐵を產出出來る事は疑ない旨の報告書がロンドンの會社迄送られてゐる。後、バーグレーが監督に派遣されたが、一六二二年インディアンの襲擊を受け、工場は破壞され、逃げかくれた子供達を除いて、全職人の外にも植民者三四七人が殺戮されるといふ慘事に遭つた。その後この工場は約百年間再建されなかつた(2)。

一方、ニュー・イングランドに於ける鐵工業について見よう。マサチュセッツ植民の目的の一つは鐵の生產にあつた(3)。我々は孤立的史實に興味をもつ事を止めて、この社會に廣汎に與つて來た鐵工業を問題とするならば、一六四三年ジョン・ウィンスロップ等によつてマサチュセッツ植民地のソーガス河畔に建てられた熔鑛爐に注意すべきである。

植民地で製造された最初の鐵は、鑛石からではなく、海岸に近い沼澤の底からとれる沼鐵（ボッグ・アイアン）であつた。其は北部から南はメリーランドの海岸地方到る所に見出された。而してかゝる鑛床に對する投機が行はれた事は申す迄もない事であつた(4)。熔鑛爐は、泥鐵鑛のある所に通

常設けられたのである。泥鐵は脆いが、すぐ熔けて流動狀となるので、型に入れて鑄物等を造るに適してゐた(5)。又、その量は限られてゐたので、その土地の泥鐵鑛が涸渴すれば、當然そこの熔鑛爐は閉鎖されるのが普通であつた(6)。當時の熔鑛爐が生產した泥鐵の量は、前述せるソーガス河畔の例について見れば、一六四八年に毎週八トンであつて、泥鐵によく適した大砲、彈丸、壺、及び其他の凹器（ホロー・ウェア）等の鑄造に永い間忙しかつた。かくて、この量、質兩面からの制約は、この泥鐵による鐵工業を、近代的大工業に迄發展させる事を不可能にしたのである。併し、その中の或ものは可成後迄行はれてゐた事は事實である。

ニュー・イングランドの場合には、熔鑛爐は英國で用ひられた衝風爐（ブラスト・ファーネス）は稀で、「ブルーマリー」といふべきものであつた。其は、爐の中に細く碎いた鐵鑛と木炭を一杯につめ、下の通風口から風を吹込んで白熱し、下に熔けてたまつた鐵滓を流出口から出す「カタラン・ブルーマリー」を改良、擴大したものであつて、風と槌の爲の小さな落水、煙突のついた粗い坩堝、及び木炭と鑛石の供給さへあれば、鐵工業者は、仕事が得られた時には、鍛冶屋の使用に適した狀態に、一日に數百ポンドの

鐵を獲得出來たのである。仕事が終つて了ふと、次の需要がある迄は爐は空いてゐた。植民地時代の初期に、かかる爐が北カロライナの山の中にあつて、農村の人々の要求に應じて棒鐵を生產してゐたといふ。かゝる方法により生產された鐵は、無駄が多い代りに、純良であつたと云はれてゐる。北ニュー・ヨーク產のかゝる鐵は、ピッツバークで良質の刃物用の鋼となつたのである(7)。

製鐵の原料は上述せる如く、植民地時代初期には泥鐵が主であつた。ニュー・ハムプシァーには沼鐵を利用するブルーマリーがあつたし、ロード・アイランドに於ける一六七五年頃迄の熔鑛爐は、マサチュセッツのブリストル郡からとれる泥鐵鑛を用ひてゐた。マサチュセッツのウィンスロップによる熔鑛爐も、ソーガス池からとれる泥鐵鑛を使用した。我々はかゝる泥鐵による鐵の生產の例を指摘するには、少しも苦しまない。

他方に於て、アパラチア山脈には多量の鐵鑛が埋藏されて居る事が發見された。そして之を利用する鐵工業も盛んとなつて行つた。例へば、コネティカット・ヒルからは、含有量の多い赤鐵鑛が生產されて、之がニュー・ヨークの鐵工場へ運び出された。ハイランヅで掘出された磁鐵鑛は、パサイック河畔のウィッパニーにある工場迄、革囊に入れて、荷馬の脊につんで何哩も運ばれねばならなかつた。又、棒鐵も同樣の骨の折れる方法で、オレンヂ山脈を横切つて、ニュワーク迄賣る爲に運ばれたのである。ペンシルヴェニアの東部、北東部等、特にサセックス郡には多數の鑛山があつた。コネティカットのサリスベリーの有名な赤鐵鑛は、十二哩離れたコロムビア郡のアンクラム運河の畔の鐵工場迄運ばれた。ヴァーモントにも磁鐵鑛及赤鐵鑛が產出されたし、ケンタッキー、テネシーでも同樣であつた(8)。以上で明な樣に、鐵鑛石から製鐵する場合、鑛石が何らかの方法で、水力、燃料、輸送等の條件のよい場所に運ばれた例が多いのである。

この外に、今一つの鐵資源について述べねばならぬ。其は五大湖周邊、特スペリオー湖附近の鐵であつて、之は南北戰爭以後のアメリカ鐵工業の主要な資源的中心である。この事は申す迄もない事ながら、一言指摘しておかねばならない。

(1) Bogart, Economic History of the American People, 1938. pp. 399—400 細野氏譯、二一七頁。

(2) この事情は何れの經濟史書にも言及してあるが、Bruce Economic History of Virginia in the Seventeenth

Century, 1907, vol. II. pp. 445—454 に詳しい。尙、この工場の勞働力、現物賃銀制、鐵工場設立費等に注意。

(3) Bolles, Industrial History of the United States, 1892, p. 189. 參照。

(4) Weeden, Economic and Social History of New England, 1620～1789, vol. I. p. 396.

(5) 混鐵につゝては、Weeden Op. cit., vol. I. p. 192.

(6) その例につゝては、Coman, Industrial History of the United States. p. 70. 尙詳しくは Swank, History of the Manufacture of Iron in All Ages, 1892. (2 ed.) p. 108.～

(7) Bolles, Op. cit., pp. 191～3. 其他 Smith, The Story of Iron and Steel, London. 1908. chap. II. 就中 p. 19

(8) Coman, Op. cit., p. 71.

四

次に、我々は鐵工業の性格を明にする爲に、その代表的形態として、鐵工場（アイアン・ワーク）、鍛冶屋（ブラックスミス）、及釘製造（家內工業）の三つを取上げ、其らが夫々アメリカ社會に於て演じた役割について考へて見る事にしよう。

先づ、鐵工場（iron-work）について述べる。一七九五年南カロライナの奥地にあるエラ及エトナ鐵工場の公賣廣告によつて、兩工場の規模、設備其他を探つて見ると略〻次の如くである(1)。

之等の工場は、カトウバ河から二哩以內のヨーク郡にあり、工場所屬の約一、五〇〇〇エーカーの土地をもつてゐて、その他に約二五箇所の農場がある。この鐵工場の敷地內に、四〇×三〇フィートの二階建煉瓦造の建物があり、地下室もついてゐる。其他の附屬建物と共に、四つの製粉工場、二つの製材工場もある。

勞働力としては、工場所屬の九〇人以上の黑人が居り、その中七〇乃至八〇人は大人で、殘りは子供である。彼等は永らくこゝで精錬工（フォギーマン）、鍛冶工（ブラックスミス）、鑄物工（ファウンダー）、鑛夫（マイナー）として働いてゐるが、又其他の仕事にも使役された。運搬車、聯畜、其他の諸道具等も工場に附屬してゐる。附屬地にはかなりの森林があり、之を樵夫が伐出し、其をこの工場に月極めで雇はれた炭燒夫が燒いて、製鐵用の木炭にする。之等の樵夫、炭燒夫は勿論の事、雇はれてゐる水車大工、大工を始め、鐵工場で働く各種職人等の賃銀は、夫々何ポンドかの鐵で仕拂はれた(2)。

製品は運河乃至河川によつて運ぶ。從つて、出來る丈運河を工場の近く迄引く事に努力が拂はれて來た。

製鐵用の石灰石は二二哩の所から、爐に用ふる石は二五哩の所から採られ、いづれも良質だつた。エラ熔鑛爐

は圓形で、底部の壁の厚さ一〇フィート、爐の底からの高さ三五フィート、ボッシ（bosshes）——爐のシャフトの下方傾斜部——の上の穴一一フィート、鑛石篩の天邊の直徑二二インチである。エトナ熔鑛爐は角型であり、大きさも前者と略〻同樣で、兩者共內部は圓形である。

之等の工場は、勞働者の種類が示す如く、製鐵の外に、各種器具をも製作して、附近の農民等の需要に應じてゐたのである。そして、之等の原鐵乃至製品は、商人の手によつて、附近に賣られて行つた事は明かである(3)。

今一つ忘れてはならぬ事は、雇傭勞働者に就てである。前述せる如く、之等の工場では黑人が重寶視されてゐた。ヴァジニアの或鐵工場では黑人勞働者に對し、一七八九年に年一〇〇弗の賃銀を支拂つた(4)。勿論この場合白人も雇はれたのである。黑人は、鐵工場に限らず、銀冶工の徒弟としても採用されてゐた。此種職人の募集廣告には、雇傭條件と並んで、黑人でも歡迎される——但し、仕事が解り、正直、勤勉、眞面目で、身元の明かな善い者との條件附で——旨が附記されてゐた(5)。

扨、この事情を今少し明にする爲に、ケンタッキー州の例をあげよう(6)。一七九一年、スレイト運河の畔に五四三四エーカーの土地を與へられて建てられた「ブルボン熔鑛爐（ファーネス）」は、間もなく、一、四二六ポンドで賣られた。この工場の勞働者は、小銃其他の武器で絕へずインディアンの襲擊から護られねばならなかつた。熔鑛爐には附屬鐵工場があつた。この鐵工場は、ケンタッキーの初期移民達に、例へば煖爐、料理器具、火熨斗といつた樣な必要な鑄物類を供給した。附屬工場が出來てからは、ケンタッキーの銀冶屋は皆こゝから棒鐵の供給を受けた。鑄物や棒鐵は車にのせて、ケンタッキーの凡ゆる地方に運ばれ、町の主な店を通じて分配された。ケンタッキーには、この爐で作つた煖爐や食器が廣く用ひられて居たといふ。そしてその生產物は、州內に止らず、遠くオハイオのシンシナティやルイスヴィルに迄も船で運ばれた。この工場には雜貨店が兼營され、ケンタッキー商人が遙々フィラデルフィア迄銀をもつて、馬の脊に跨り、商品を仕入れに行き、歸りは荷馬車に商品を積んでピッツバーグに歸り、そこから平底船でオハイオの各地に運ばれ、その一部はこの工場にも齎らされたのである。又製粉場もこの工場に併設されてゐた。

又、北カロライナ西部及テネシー東部の原野に小さな熔鑛爐が點々と存在した(7)。之等の小さな、併し健全な聚落に、細いけれども、力强い煙をあげてゐる小さな

三田學會雜誌　第四十二卷第七・八號

第一に先驅者が來る。彼は自分の家族の衣食を主に草木の自然的成長と狩獵の獲物に依存してゐる。彼の農具は粗末で、主に手製であり、彼の努力は主に玉蜀黍の收獲と「野菜畑」に向けられる。野菜畑といふのは、キャベツ、豆類、玉蜀黍、胡瓜、及馬鈴薯を植へる粗末な庭である。丸太小屋一棟、十二エーカーの耕地、材木、之丈あれば充分である。彼が何時かその土地の持主になるか否かは取るに足らない。彼はとに角占有者であり、地代は鏃一文だつて拂つては居ないし、「領主」の様な獨立感を抱いてゐる。馬と牛と一、二匹の種豚をつれて、彼は家族と共に森林の中に突進んで行き、新しい郡や州の建設者となる。彼は小屋を建て、その周圍に同じ好みと習慣の他の數家族を集める。あたりが幾分開けて來る迄住んでゐて、狩獵をしてゐる。又よくある事だが、近所の人々が集つて來て、道路や橋や畑が彼を惱ましし、自分が自由に活動出來る餘地がなくなつて來る。先買法は彼を、その小屋と玉蜀黍畑を後からやつて來る移住者に賣拂つて、アーカンソーかテキサスへ移住し、同じ過程を進めさせる。

次に移住して來る連中は、土地を買ひ、畑を段々增して行き、道路を作り、小川に粗末な橋を架け、丸木小屋を建てる。この小屋にはガラス窓もあり、煉瓦か石の煙突もある。時には果物畑もついてゐるし、水車小屋、學校、裁判所等を建てる。そして簡素な、つゝましい文化生活の姿があらはれて來る。

次の波がやつて來る。資本家や企業家が來る。「定着農民」はいつでも財産を賣拂つて一儲けし、もつと奥地へ入つて行き、次第に彼自身資本家や企業家にもなる。小さな村落は廣い町か市になり、煉瓦作りの澤山の建物、廣い耕地、果樹園、庭園、大學及教會が見られる。廣幅羅沙、絹、麥桿眞田帽、縮緬、及すべての洗練された品物、贅澤品、優美なもの、輕薄なもの、流行品がはやつて來る。

かくて後から波が押寄せて、西部へと進んで行く。——眞の理想黄金國は未だ〳〵遠いのである。……云々。

こゝで明な様に、第一の社會では如何なる規模の工業も問題とならない。又第三の社會は、いはゞ「海岸社會」——大土地所有者、大商人、投機業者等の支配する社會——の波及と見る事が出來やう。而して最後に、第二の其は、典型な西部社會であると云つてよいであらう。そこで、我々はこの社會について更に詳しく知る爲に、今

爐、こゝに我々は後日のアメリカ鐵工業の息吹をヒシヒシと感ずる。之等の爐はその所有者の欲望のみならず、近隣の農民や鍛冶屋の需要をも充してゐたのである。原生的形態に於けるアメリカ鐵工業が、顯著な特徴として、斯かる姿をとつてゐた事は決して忘れてはならない。尙附言するならば、かゝる段階の社會に於ては、鐵は高價であり、貴重であつたので、棒鐵が通貨として行はれてゐた事は容易に想像出來る。併し乍ら、其は一般的等價として、全く析出されて了つたわけではなく、時と所を異にすれば、通貨の役割を認められた商品も亦異つたのである(8)。（例へば、煙草）

以上の例で明白となる點は、鐵工場は、多く廣大な土地の拂下を受け、製鐵及加工を行つてゐて、その生産は、農村と密接に結びついてゐた事、勞働力として特に南部では黑奴が重用された事、工場には附屬の農場や店舗もあつて、一つの經濟單位を形成し、ironplantationと呼ばれてゐた等である。

(1) Commons & Associates, A Documentary History of American Industrial Society, 1910. vol. II. Plantation and Frontier. pp. 304～312.

(2) Weeden, Op. cit, vol., I. p. 177, 182.

(3) かゝる商業については、Callender, Readings from the Economic History of the United States. 1765～1860. 1909. pp. 276～280.

(4) Commons & Associates, Op. cit., pp. 348.

(5) Commons & Associates, Op. cit., p. 348～9.

バイニングは、ペンシルヴェニア鐵工業の勞働者構成を、(1)自由勞働者、(2)年期奉公人、(3)、ニグロ奴隷及び解放奴隷、(4)日傭職人及徒弟であるとしてゐる。(Bining, Pennsylvania Iron Manufacture. pp. 110～1.)社會經濟史學 14 の 1. p. 61.)

(6) Swank, Op. cit., pp. 282～4.

(7) Swank, Op. cit., pp. 298～9.

(8) Swank, Op. cit., p. 299. Weeden, Op. cit. vol. II. pp. 471～2.

扨、次に鍛冶屋についてみよう。この問題に答へる爲に、我々はあの周知のペックの「西部への移住新案内」(1)を取上げる。そこには、西漸運動の進行による三つの社會の段階が描かれてゐる。以下我々の考察を明確にする爲に、煩をいとはずその大要を紹介すると略〻次の如くである。——

一般に、凡ての西部植民地に於ては、大洋の波濤の如くに、三つの階級が後から後から押寄せて來る。

少しく當時の旅行者の筆を藉りよう(2)。

「……住民は、彼等の夫々の欲望を、自ら滿さねばならぬ。其は、多量の商品を海岸から奥地に運ぶのが困難であり、費用もかさむ結果である。旅行者は、紡車や機のブンブンいふ響に間もなく慣れて了ふ。樣々な棉製品や羊毛製品が、自家用に十分な丈作られて居る。そして我々が、鹽と砂糖を除けば、この州の奥地の人々は、外部から獨立してゐると考へられる。といふのは、大工、銀冶工、石工、鞣皮工、製靴工、製鞍工、製帽工、水車大工及其他の職人は、その地方中に便利に位置してゐるからである。そして、彼らの夫々の仕事に必要な物は、豐富に手に入るのである。」

而して、かゝる牧歌的社會は、決して十九世紀初頭の南カロライナに限つた事ではなく、寧ろ多少の差異はあれ、南北を問はず存在したと思はれ、又西漸運動に伴つてフロンティアに絶へず作出されて行つたものと見てよいのではなからうか。

……植民地時代初期に於ては、工業は主として顧客注文生産だつた。勞働者の家庭が仕事場であり、お得意の注文をうけて生産が行はれた。職人は生産者でもあり、亦商人であつたわけだ。人口が增加し、市場が擴大する

に及び、親方は職工を集めて、注文生産契約生産に從事するのみならず、注文をまたずして安い販賣向商品の生産に努め、獨立革命當時既にかゝる小賣注文の段階に入つてゐた。

かゝる定着勞働者の外に巡回靴屋や仕立屋の如く、僅かの手道具と熟練さへあれば足りる工業では巡回勞働者が居た。彼等は戸毎に聞いて廻り、お客の原料で生産し、その代り賄ひ、宿泊や僅かの賃銀を得た。銀冶屋、機屋、パン屋の樣な可成り資本のいる商賣では、自分の店をもつてゐて、お客の方から買ひに來た。人口の增加、運輸機關の發達につれて、巡回職人は廢れて、定着勞働者が多くなつた(3)。――といふボガートの一般的敍述は、かゝる社會をも説明するものと考へて、甚だしい誤ではない。實際、この樣な小村落社會に於ては、どの村落にも「中世の職人と、近代の機械工との中間的性格をもつ銀冶屋」が居て、近所の仕事をテキパキと、手際よく片附けてゐたのである。我々は植民地の各地に、「――のトバル・カイン」と呼ばれた有能勤勉な銀冶屋を見出す事が出來る(4)。以下に、彼等がどんな役割を該村落に於て演じてゐたかを、もつと詳しく知る爲に、例を十七世紀のヴァジニアにとれば、その姿は略〻次の如

くであつた(5)。――

銀冶屋の仕事は、多分その一般的性格をもつ凡ての職業の中で最も報酬の少いものであつた。……鐵も亦その當時は高價な金屬で(6)、一般には銀冶屋の店では、極く少しゝか見出されなかつたらしい。(卽ち、鐵の生産自體が猶少なかつたか、その社會に鐵が少なかつた時には、銀冶屋の仕事も亦少なかつたのであつて、農業の傍ら仕事場をもつてゐて、仕事のある時にするといふ事が行はれてゐたのである。而してこの事は、銀冶屋に限らず、職人に一般的な現象であつた(7)。)

銀冶屋は時には銀匠の機能も果した。又時には銃身や銃機が破損した銃砲の修理をしたり、劍の燒を入れ直した。一六九一年、この職人が、報酬は煙草でなければ受取らぬと云つて、兵隊の小銃の修繕を斷つたといふ不平が民兵の指揮官から總會に出された。又銀冶屋が法外の支拂を要求するので、彼らの利益を統制する必要があると時々考へられた。實際、銀冶屋が、支拂の媒介物たる煙草の價格の變動を慮つて、自己を守る爲に報酬を大にする事はあり得る事なのである。

今一つ顯著な現象として、この時代の地方の記録は、この職業の人々が、小土地を獲得出來たといふ事を示してゐる(8)。

この樣にして、植民地時代初期の銀冶屋は仕事が少なかつた事、仕事は家庭用具の製作や農機具の修理等の外に銃器の修繕等も行つた事、報酬は高く從つてフロンティアで最初に富裕になるのは職人であつた事(9)、彼らが大小の地主化した事を指摘したわけである。

然らば、かゝる銀冶屋の店の内部はどうであつたらうか。次に、ラルフ・ウォーメリーといふ人の所有する銀冶屋の店の一つについて、その内容を列擧してみると、左の通りである(10)。卽ち 屑鐵一、〇〇〇ポンド、鞴一對、鐵床一、流滓止一、大萬力一、手萬力四、螺板、雌螺型、鑢、鐵槌、鐵鉗　これである。

以上によつて、仕事場の内容が略〻判明した。更に今一つ重要な事は、銀冶屋の使用した鐵の入手經路である。鐵の産地は一應問題はないとしても、然らざる場合には、鐵は原鐵の形で、鐵商人 iron-merchant, iron-trader の手によつて、彼らの仕事場迄齎らされた(11)。尙念の爲一言すれば、銀冶屋は決してフロンティアや農村にのみ存在したのではなく、町にも勿論あつたのである。併し、町の銀冶屋も、結局以前は「村の銀冶屋」(country blacksmith) であつた場合が多いのである。

以上に於て、我々は獨立自營農民を主體とする社會に於ける「農村小工業」の性格をもつ鍛冶屋について考察して來た。

(1) J. M. Peck, A New Guide for Emigrants to the West, Boston, 1837. pp. 119～121. 本書は多くの史書に引用されてゐる。西部移住案内書であるから、西部を美化してゐる事は當然想像出來るが、この事は當面の問題に大して關係はない。

(2) Bogart & Thomspson, Readings in Economic History of the United States, p. 268. 之は一八〇七年南カロライナ州バック郡の様子である。

(3) Bogart, Op. cit., pp. 108～109. 邦譯七六―七頁。尙 Unwin, Industrial Organization in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, Introductin 參照。

(4) Weeden, Op. cit., vol II. pp. 806～7. かゝる鍛冶屋の例は、Thomas B. Hazard, 古くは、Joseph Jenks. 等。

(5) Bruce, Op. cit., vol. II. pp. 418～420. (次の註(6)、(7)はブルースのつけた註ではなく筆者のものである。)

(6) Weeden., Op. cit, vol. II. pp. 877～903 の物價表(一六三〇―一七八九年)參照。この場合他の物價と比較されたい。

(7) Bruce, Op. cit., p. 400. 以下。

(8) ブルースは次の様な例をあげてゐる。――一六七一年、ラッパハンノック郡に鍛冶屋が、廣い土地の購入者として現れた例があるし、又、農園(プランテーション)の一部を煙草四千ポンドで、その後に次の部分を二千ポンドで賣拂つた例がある。小土地所有者であるヨークの鍛冶屋の中には、オーエン・デヴィー、ジェイムズ・ダービージェア、及ウィリアム・ライスがある。一六八四年ローワー・ノーフォーク郡のウォーター・ビンフォードは七〇エーカーの廣い土地を買つた。アイザック・ゴーディングは一六七七年にミドルセックスに一五〇エーカーの農園(プランテーション)を買つた。ダニエル・フラーハーはランカスターに一五〇エーカー、ジョセフ・デバーは二六〇エーカーの大地をもつてゐた。一六五三年ジョン・ウィリアムズはノーサムプトン郡に二〇〇エーカーを獲得した。チャルス・バーカーは猶一層富裕だつた。彼が死んだ時、若干の廣大な土地のみならず、水車場(ウォーター・ミル)をも遺言で贈つた。(Bruce, Op. cit., vol. II. 419～20)

(9) Fearon, H. B., Sketches of America, a Narrative of a Journey of Five Thousand Miles through the Eastern and Western States (London, 1819). p. 281. 日高明三教授著「獨立自營農民の政治像」一四〇頁より引用。本書の秀れたフロンティア社會の分析には、學ぶ所多大であつた。記して特に感謝したい。

(10) Bruce, Op. cit., vol II. p. 418. note. 2.

(11) 前述せる鐵工場の項の説明參照。特に鐵工場と鍛冶屋との關係に注意されたい。(前出六八、六九頁參照)そこに引用した Swank, Callender 等の該個所參照。

(12) 「村の鍛冶屋」になる徑路は、移民鐵工業者の場合、親などの仕事場を受繼いだ場合、仕事を鐵工場乃至鍛冶屋等で學び(西部へ行つて)自分の店を開く場合。農民が片手間に始めた場合等が最も多い。

最後に、家内工業的に行はれた鐵工業――釘製造について述べるべき段階に到達した。申す迄もなく、植民地時代初期には、釘に限らず、鐵そのものが無かつた。植民者達の携行すべき品目の中に、鐵、鋼及び多數の釘が擧げられてゐる(1)。植民地時代の永い間、鐵製品が極めて高價だつたので、植民者達はホンの必要量しか釘を買へなかつた。といふわけで、小土地所有者は、ヨリ肥沃な土地を目指して移住する時には、自分の小屋を拋棄する時之を燒いて、厚板をとめてあつた釘を獲得するといふ習慣があつた。この習慣が非常に一般化して來たので、一六四四―五年に、かゝる家を燒く様な動機をなくす爲に、その家に使つてあつたと同量の釘を、公費で支給するといふ事が法律で規定された(2)。斯の如く、釘は極めて缺乏してゐて、初期には輸入されてゐたが、漸次植民地でも作る様になつたのである。大量の釘が截斷工場(スリッティング・ミル)で製造された事は勿論であるが、この他方農家に於ても廣汎に作られてゐたのである(3)。こゝでは工場生産の方は問題の外におき、各家庭内で行はれた釘製造につき一言しやう。釘及び鋲の製造は、ニュー・イングランドの農民に相當の收入を齎した家内工業であつた(4)。農家では、煙突の隅に小さな爐(ファーネス)を設けて、冬季(ニュー・イングランドは冬季氣候酷烈で、戸外勞働に適しない)の夜間、大量の釘、鋲を製造した。この仕事は、男の外に少年でも出來た。鐵床とハンマーさへあれば、男一人で一日に鋲が二、〇〇〇本作れたと云はれてゐる。而してかゝる農家の釘製造に用ふる細い棒狀の鐵(ロッド・アイアン)は、近所の截斷工場――そこでは、持主が勞働者に賃銀を拂ひ、生産物を市場に出す爲の生産が行はれてゐた。――から供給されてゐたのである(5)。この場合、農民は棒狀鐵を商人の手から受け、釘にして再び商人の手に歸し、報酬を貰つた。この様な容易な「バーター制」で作られた結果、その製造は驚くべき額に達した(6)。こゝに我々は商業資本に支配されてゐた前貸制家内工業を見出すのであるが、前記の截斷工場までも、商人が經營したものであるのか、然らずして、商人は工場と農民の間に介在して前貸

するのであるのか、この點は明にし得ない。併し、とにかくかゝる方法は、一七九〇年パーキンズの釘截斷機の、發明によつて、家内工業的な釘製造のみならず、棒狀鐵を供給してゐた截斷工場も亦急速に沒落して行つたのである(7)。

(1) Bogart & Thompson, Op. cit., p. 2.
(2) Bruce, Op. cit., vol. II. pp. 146〜147.
(3) 即ち、小さな釘は彼らが煩雜な手仕事でやるよりも廉價に輸入されたが、普通の釘や大釘は鍛冶屋の普通やらない仕事だつた。(Weeden, Op. cit., vol. II. p. 683)
(4) Weeden, Op. cit., vol. II. p. 856.
(5) Coman, Op. cit., p. 71.
(6) Swank, Op. cit., p. 133., Weeden, p. 683, 793.
(7) Swank. Op. cit., p. 133.

以上に於て、私は鐵工業の經營形態を代表して、三つの形態——鐵工場、銀冶屋、釘製造——を擧げ、その性格の農業的なる事を極く大ザッパ乍らも論じて來た。

最後に、かゝる鐵工業によつて生産された品目は、鐵・鋼そのものゝ生産を除けば、釘、刃物、銃砲、斧及び鋸、農機具、機械・道具類、針金、時計、パイプ、ミシン、ストーヴ、金庫、機關車、鐵橋、印刷機械、水車、錠前、ポンプ、レール、車輛等々多種多樣である。之等の中、初期に造られてゐたのは、前半の諸製品である。

五

以上に於て論じて來た事は、以下に於て問題にせんとする主題——アメリカ産業資本の系譜的研究——の伏線たるべきものである。

扨、我々は第二節に於て提起した問題に再び戻りたい。私がこの主題の解決の爲に利用し得る資料——其は人名辭典である(1)——は極く限られてゐた。私は之によつて植民地時代初期から南北戰爭直後迄の鐵工業者約一三〇名の系譜を探つて見た(2)。

(1) Allen Johnson, (ed.), Dictionary of American Biography (N. Y. 1928〜1936) 20 vols. 本書は一八八五—一九〇〇年英國に於て刊行された Dictionary of National Biography に刺戟されて、アメリカ歴史學會、同經濟學會、同政治學會等十九學會の構成する American Council of Learned Society の主導下に、高い學問的水準と、可能な限りの容觀的内容を目標とした現代米國最高の辭典である。總費用六五萬弗、項目數一三、六三三名、總頁數一二、六七五頁、所要年數九年、各界の著名人物を網羅して

ゐる。尚 American Historical Review, vol. 35, p. 119, p. 624. 所收の、本書の一部に關する書評參照。

(2) かゝる系譜的研究は、イギリスに關しては、有名なアンウィン、マントー等の研究があり、アメリカ鐵工業についても Bining, A. C., Pennsylvania Iron Manufacture in the Eighteenth Century, (Harrisburg, 1938) pp. 132〜4. に同じ研究があり、その前半が「鐵鋼聯盟調査月報」第八—十二號に市川弘勝氏によつて邦譯されて連載されてゐる由であるが、筆者は遺憾乍ら手にし得なかつた。（鈴木圭介氏「合衆國初期の經濟政策」社會經濟史學第十四卷第一號所載。）

又、之と問題のとらへ方は異るが、興味ある研究がなされてゐる。Taussig & Joslyn, American Business Leaders, N. Y. 1932. 本書は副題として A Study in Social Origins and Social Stratification としてある。併し之は現代米實業界指導者に就ての調査であつて、調査對象約一萬五千名に質問書を送附し、解答を集めたもので、調査者の希望する資料＝項目がよく集められてゐる。筆者の場合、過去の人物である事と、希望事項が不明な事とによつて、調査が甚だ意に滿たぬものとなつた。以下の表に「不明」とあるのは、かゝる事例の多きを示すものである。

調査對象を、製鐵業者（アイアン・マスター）と其他の鐵工業者（アイアン・ファクト）に二分し、夫々を、(イ)一七五〇年（鐵條例）迄、(ロ)一七五〇—一八一五年（ナポレオン戰爭終了）迄、(ハ)一八一五—一八五七（恐慌による商業資本沒落）迄、(ニ)一八五七—南北戰爭直後迄（産業資本確立）に分けた(1)。

(1) 時代別にする標準は、自己の工場設立の年を以てし、徒弟等として他人の工場に入つた年ではない。獨立の自己の作業場設立の年代である。

〔補説〕

(1) 以下の諸表は、煩雜な感を抱かせる迄に個別性をその儘殘してある。之は研究の性質上餘りに簡單に分類して了ふ事は系譜の多樣性を蔽つて無意味にするからである。一言して置く。

(2) 尚以下の分類は、整理の都合上、或程度横に分類したが、個人の縱の繋りこそ重要であり、その變化は無限に興味あるが、こゝでは餘りに個別的にわたるので、止むを得ず、かゝる横の分類法を採らざるを得なかつた。併し、父——本人の系譜こそ、この研究の基礎となつたものである。

〔一〕 製鐵業者（アイアン・マスターズ）　十二名

(イ) 一七五〇年迄　　二名〔第1表參照〕

(1) 移住鐵工業者とは、アメリカに移住する以前に既に鐵工業に從事してゐた者で、外國生れで移住した後鐵工業に始めて從事した者はこの項の中に入れず、「鐵工業者」

調査項目 / 鐵工業者		出生地	工場所在地	父の職業	本人の前歴
第1表	A	イングランド	ヴァジニア	貴族	移住鐵工業者(1)
	B	アイルランド	ペンシルヴェニア	グッドファミリー（中產階級）	鐵工業者
第2表	A	マサチユセッツ	マサチユセッツ	鐵工業者	鐵工業者
	B	ペンシルヴェニア	ペンシルヴェニア	ウィッグ黨員	鐵工業者
	C	スコットランド	ニュー・ヨーク	小農	農民
	D	スイス	ニュー・ジャージー	不明	契約奉公人
	E(2)	ペンシルヴェニア	ニュー・ジャージー	フィラデルフィア商人	土地投機業者
	F	アイルランド	南カロライナ	（先祖は英家系）	農民
第3表	A	ニュー・ジャージー	オハイオ	クロムエル軍士官(3)	雜役勞働者(5)
	B	イングランド	アラバマ	製鐵業者	鐵工業者
	C	ペンシルヴェニア	ペンシルヴェニア	農民 釜水車大工(4)	鐵工業者
第4表	A	アイルランド	ミネソタ	馬具製造者	運送業勞働者(6)

の項に入れた。Bがその例である。

(ロ) 一七五〇――一八一五年　迄　六名〔第2表參照〕

(2) 製鐵業者Eの父はフィラデルフィア商人であり、祖父も亦フィラデルフィア商人であつた。彼は佛印戰爭の時鐵工業をやめて了つてゐる事は注意すべきである。

第1、第2表に於て、移民の多い事、及び數的には僅かではあるが、早くも〔鐵工業者、農民〕對〔前期的商人、投機業者〕の對照が現れて來てゐる。

(ハ) 一八一五――一八五七年　三名〔第3表參照〕

(3) クロムエル軍の士官は、あの秀れたエトスの持主である清教徒であり、ヨーマンリーに屬した事を想起すべきであ

アメリカ產業資本の形成

る。

(4) 農民釜職人のあり方をよく物語る一例である。

(5) 鐵工業者として獨立する前には鐵工場勞働者を經てゐる。

この時代に於ても、鐵工業者、半農半工の小生產者、職人層が我々の眼を惹くのみである。

(二) 一八五七――南北戰爭直後　一名〔第4表參照〕

(6) 少年時代に電報配達人、獨立前は鐵工業勞働者を經てゐる。

以上の諸表に於て、結論を下す事は無暴であるが、この中に注目すべき事例は概ね現れて來てゐる。即ち、外國出生者の移民である場合が多く、而も彼等の中「西部」に入つてゐる者が第3表に始めて現れる事は、西漸運動と思ひ合すべきである。又彼等の父及彼等自身は、多く鐵工業者、農民、職人乃至勞働者の出身であり、所謂「前期的資本」の範疇的轉化の例は少い。併し、かゝる考察は、結論ではなくて、以下のヨリ多數の調査の、いはゞ、「豫表」たるべき意義をもつと考へるべきであらう。

【II】　鐵工業者　一一〇名

念の爲一言すれば、こゝに「鐵工業者」といふのは、農機具、刄物、釘、武器（銃砲、刀劍、彈丸類）、ミシン、鋸及斧、ポンプ、針金、家庭用鐵器、車輛其他の製造業者を指すものである。尙、南北戰爭以後の樣な、分業の高度化する以前には之等の製造業も製鐵工程を自ら行つた――この事は時代を遡る程顯著である――事を附言しておく必要があらう。

(イ) 一七五〇年迄　五名〔第5表、第6表參照〕

第5表

出生地 ＼ 工場所在地	マサチユセッツ	イングランド	スコットランド	不明	計
マサチユセッツ	1	2	1	1	5

第6表

父の職業 ＼ 本人の前歴		鐵業工者	移住鐵工業者	計
鐵業者	熟練鐵工	—	1	1
	鍛冶屋	1	—	1
	銃砲鍛冶	1	2	3
不明				
計		2	3	5

こゝでは、我々は鐵工業者の外には何者をも見出さない事と、彼らの中三名は清教徒であつた事を指摘すれば足りる。

(ロ) 一七五〇――一八一五年　一四名

〔第7表參照〕

第7表

出生地＼工場所在地	マサチュセッツ	ロード・アイランド	コネティカット	ペンシルヴェニア	ニュー・ヨーク	ニュー・ジャージー	不明	計
マサチュセッツ	5	—	—	—	—	1	1	7
ロード・アイランド	—	2	—	—	—	—	—	2
コネティカット	—	—	1	—	—	—	—	1
ペンシルヴェニア	—	—	—	—	—	—	2	2
イングランド	—	—	—	1	—	—	—	1
プロシヤ	—	—	—	—	1	—	—	1
計	5	2	1	1	1	1	3	14

右の表について云ふならば

(a) 工場所在地は東部諸州のみで、西部にはない。

(b) 顯著な交流は見られず、出生地と工場所在地とは多く一致してゐる。

(c) 移住者も東部に居り、西部に入つてゐない。

〔第8表參照〕

第8表

父の職業＼本人の前歴	鐵工業者 鐵工業者	鐵工業者 移住鐵	農民	自由業 法律家	自由業 醫師、教師、藥劑師兼	重役保險會社(2)	不明	計	
鐵工業者 鍛冶屋	2	1	—	—	—	—	—	3	7
鐵工業者 小工場主	1	—	—	—	—	—	—	1	
鐵工業者 鑄物業者	1	—	—	—	—	—	—	1	
鐵工業者 熔鑛爐所有主兼鐵商人(1)	1	—	—	—	—	—	—	1	
鐵工業者 農業兼鐵工業	1	—	—	—	—	—	—	1	
農民	1	—	1	—	—	—	—	2	
獨立職爭兵士	—	—	1	—	—	—	—	1	2
關稅徵收區長	—	—	—	1	—	—	—	1	
移民(職業不明)	—	—	—	—	1	—	1	2	
西印度商人(2)	—	—	—	—	—	1	—	1	
計	7	1	2	1	1	1	1	14	
	8			2					

(1) はプロシヤの其で、商業資本家であつたのか、生産者にして商人だつたのか不明である。前者とすれば、前期的なものと見ればならぬ。

(2) 兩者の職業の關係は、前述のフィラデルフィア商人と土地投機業者の關係を思ひ起させる。

右の表に關し

(a) 父の職業に就いては、中産階級（ミディオクリティー）と思はれる者十一名に對し、明白に前期的な者は西印度商人一名である。職業不明の移民は多く農民及職人であつた事情も併せ考ふべきであらう。

(b) 彼等自身の鐵工業に從事する以前の職業は、大部分鐵工業者、農民、自由業に屬し、所謂「前期的資本家」ではないのである。

(c) 父子の職業の相違（ストラティフィケーション）傳は、鐵工業者に顯著である。この職業が比較的大なる資本を要する事も、その理由である。

(ハ) 一八一五――一八五七年　七三名

〔第9表參照〕

右表に於て

(a) ペンシルヴェニア、ニュー・ヨーク、マサチュセッツ、コネティカット、イリノイ、ニュー・ジャージー等の諸州は工場數も多く、鐵の生産とも

一致してゐる。一八六〇年ペンシルヴェニアでは全アメリカ鐵工場の約半數があつたとされてゐるが、本表に於てはかゝる數字は出なかつた。かゝる多數の工場主の全部が後日大をなしたとは限らぬし、著名な者以外は人名辭典――如何に浩瀚なりとは云へ――には載らぬからであらう。

(b) 出生地と工場所在地が一致してゐるのは當然の事である。又、東部諸州では相互間の交流が行はれ、西部では東部からの移住者が多い。五大湖周邊の諸州の少いのは年代の爲である。

〔第10表參照〕

(1)――(4)のあり方に注意。

(5) は製鐵業者と鍛冶屋又は農民を繋いだ、あの鐵商人の例である。（前節に說明せる個所を參照。）但し、彼は後他の商業に轉じてゐる。

(6) も(5)と同樣前節參照。鐵工場の製品を商人の手から受取つて、一般消費者に販賣した店舗の持主であつた。

(7) は明白に商業資本のあり方であつた事は申す迄もない。利潤そのものを追つて、轉々と業を替へてゐる點に注意。

(8) はセント・ルイスとニュー・オルリンズ間のミシシッピ河を上下した例の穀物商人であつて、後にはメ

第9表

出生地＼工場所在地	マサチュセッツ	コネティカット	ロード・アイランド	ヴァーモント	ニュー・ヨーク	ペンシルヴェニア	ニュージャージー	ヴァジニア	ジョージア	オハイオ	イリノイ	ウィスコンシン	ミシガン	インディアナ	カリフォルニア	不明	計
マサチュセッツ	10	3	1	—	4	—	2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	21
コネティカット	—	2	1	—	1	1	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	6
ロード・アイランド	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
ヴァーモント	—	1	—	1	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	5
ニュー・ヨーク	—	—	—	—	7	—	1	—	—	—	—	2	—	—	—	—	10
ペンシルヴェニア	—	—	—	—	—	3	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	5
ニュー・ジャージー	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ヴァジニア	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	—	—	—	—	—	—	4
ジョージア	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
オハイオ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2
ニュー・ハムプシャー	2	—	—	—	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	5
イングランド	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	3
スコットランド	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
アイルランド	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ウェールズ	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
フランス	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
不明	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3
計	18	7	2	1	16	5	5	3	1	4	4	2	1	1	1	2	73

出生地＼職業	馬具製造	牛馬飼育者	農民	パイオニア	牧師	教師兼農民	軍人（造兵）	雇家	鐵卸賣商(5)	鐵器商店(6)	棉工場、鐵道及銀行(7)	品物及穀物商人、地銀取引商、日用(8)	土地差配人(9)	呉服屋	商社會計員	人（不明）	不明	計
マサチュセッツ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
コネティカット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
ロード・アイランド	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
ヴァーモント	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
ニュー・ヨーク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ペンシルヴェニア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ニュー・ジャージー	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ヴァジニア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
ジョージア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
オハイオ	1	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	13
ニュー・ハムプシャー	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
イングランド	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
スコットランド	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	3
アイルランド	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
ウェールズ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
フランス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
商人（不明）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
計	1	1	8	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	73
他			9		5				9									
共																		21
人																		6
商																		16
他																		9
自由業																		4
農民																		10
																		7

第10表

父の職業 ＼ 本人の前歴	鐵工業			職人・勞働者・製造業									
	鐵工業	移住鐵工業者	農兼鍛冶屋	化學工業	鉛亜鉛製造	眞鍮鑄物業	織機製作	寶石工場勞働者	大工	木製ボート製造	木造椅子製造	張石製造	製粉製材等
鍛冶屋	3	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
刃物製造	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
農機具製造兼(1)作造販造	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
材木屋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
鍛冶屋	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
荷馬車製造	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
時計製造	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
鐵器製造	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
針金製造	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
農業兼鍛冶屋(2)	2	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
銅匠	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大工造	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
レ他製	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
其ース	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
農民	3	1	—	1	—	—	—	—	1	—	1	—	1
バイオニア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
農民兼大工(3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
軍人	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
學者	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
州議員	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
醫師	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
教師兼農民(4)	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
檢事	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
牧師	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商人	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
信託業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
船主	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
驛馬車經營	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
移民（職業不明）	5	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	1	—
不明	1	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—
計	28	1	6	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1
	35			14									

キシコと地銀の取引をした者である。

右の表に關し、

(a) 父の職業は、農村や町の小生産者、農民、自由業等の中産階級に壓倒的多數が屬し、少くとも五二例を數ふるに對し、商人層に屬する者は四例にすぎない。

(b) 本人前歴で、明白に前期的性格をもつた者は(7)——(9)の三例であり、其他の六例を前期的とするのは、疑問である。之等が全部然りとしても、六二對九で、約一割五分に當るに過ぎない。

(二) 一八五七——南北戰爭直後　一二八名

〔第11表參照〕

右表に關し、

(a) 依然東部諸州の多い中にも、西部の州名も見受けられる。

(b) 東部諸州内での交流は前と同じ。西部諸州の其は、西漸運動につれて移住したもので、多く隣接州から來てゐる。

〔第12表參照〕

(1) 申す迄もないが、インディアンとの間に行つた、あの毛皮取引者ではない。

右の表に關し、

(a) 父の職業に就ては、中産階級對商人の比は、二三對一である。この商人も前期的とする事は、多分妥當ではなからう。

(b) 本人の前歴に就ては、之等の商人層三例に對して、中産階級は二五例である。「荒物屋」は、前節ケンタッキー商人の如きものであるか、かゝる商人から商品を受けて、販賣してゐた者であらう。

扨、以上に於て、多數の表を考察し來つたが、次に煩を忍んで、製鐵業者及鐵工業者の、父の職業と本人の前歴を、年代別に夫々分類してみると左の如くである。

〔第13表參照〕

〔註〕各數字の右下の()内の小數字は%を表はす。勿論之は資料が少い爲、極めて眞證性に乏しいが、年代別の構成割合を知る爲に、多少は參考になると思つて、算出してみたまでゞある。

〔第14表參照〕

〔註〕前表に同じ

以上の二表に於て、年代別の構成割合變化は、餘り問題とはならないと思はれる。特にこゝでは性急な結論を避けたいと思ふ。

第11表

出生地＼工場所在地	マサチュセッツ	ペンシルヴェニア	ニュー・ヨーク	コネティカット	ロード・アイランド	オハイオ	イリノイ	テネシー	ニュー・ジャージー	インディアナ	アラバマ	ウィスコンシン	計
マサチュセッツ	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ペンシルヴェニア	—	2	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	3
ニュー・ヨーク	1	1	4	—	—	—	—	—	2	—	—	1	9
コネティカット	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2
ロード・アイランド	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	3
オハイオ	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	2
ヴァーモント	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
テネシー	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	2
メイン	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
スコットランド	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ウェールズ	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
カナダ	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2
計	1	6	6	2	3	1	3	1	2	1	1	1	28

第12表

父の職業＼本人の前歴	鐵工業	製造業者、職人、勞働者：棉工業	大工	陶器金屬器製造	鞭製造	製粉業	仕立屋	不熟練勞働者	農民：農民	パイオニア	醫師	牧師	自業	銀行及不動産業務	商業：呉服屋・銀行業	人他：荒物屋（雜貨店）	計	
鐵工業：熟練鐵工	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	7
鐵工業者	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
鑄型製作	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
時計製販	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
機械工	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
農機具製造	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
職人・製造業者：手織工	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	5
陶器金屬器製造	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
鞭製造	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
製粉業	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
仕立屋	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
農民：農民	1	—	1	—	—	—	—	—	1	—	1	1	—	1	1		7	10
パイオニア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—		2	
農民兼職工	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—		1	
醫師兼農民	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—		1	
皮革商人 (1)	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		1	
移民(職業不明)	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—		3	
不明	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		1	
計	11	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1	1	1	1	1		28	
		7							5		2		3					

第 13 表（製鐵業者及鐵工業者を含む）

父の職業 ＼ 年代	～1750	1750～1815	1815～1857	1857～南北戰爭直後	計
鐵工業	2 (23.6)	8 (40)	22 (28.9)	7 (24.1)	39 (29.6)
職人・製造業等	—	—	6 (7.9)	6 (20.7)	12 (9.1)
農民	—	3 (15)	17 (22.4)	10 (34.5)	30 (22.7)
自由業	—	—	9 (11.8)	1 (3.5)	10 (7.6)
其他中產階級	1 (14.3)	3 (15)	1 (1.3)	—	5 (3.8)
移民・不明	3 (42.8)	4 (20)	17 (22.4)	4 (13.7)	28 (21.2)
商人其他	1 (14.3)	2 (10)	4 (5.3)	1 (3.5)	8 (6.0)
計	7(100.0)	20(100)	76(100)	29(100)	132(100)

第 14 表（製鐵業者及鐵工業者を含む）

本人の前歴 ＼ 年代	～1750	1750～1815	1815～1850	1850～南北戰爭直後	計
鐵工業	7(100)	10 (50)	37 (48.7)	11 (37.9)	65 (49.2)
職人・製造業等	—	1 (5)	15 (19.8)	8 (27.5)	24 (18.2)
農民	—	4 (20)	9 (11.8)	5 (17.3)	18 (13.6)
自由業其他	—	2 (10)	5 (6.6)	2 (6.9)	9 (6.9)
移民・不明	—	1 (5)	1 (1.3)	—	2 (1.5)
商人・其他	—	2 (10)	9 (11.8)	3 (10.4)	4 (10.6)
計	7(100)	20(100)	76(100)	29(100)	132(100)

六

以上の結果を要約すれば、アメリカ植民地時代初期から南北戰爭直後迄の製鐵業者及鐵工業者の

〔A〕出生地、工場所在地共に、北部及中部に多く、時代の降るにつれて西部にも見受けられて來る。兩者の交流關係は、東部諸州相互間及び西漸運動によるものである。

〔B〕父の職業は、鐵工業者、農民、職人及製造業者、そして自由業であり、ベンジャミン・フランクリンの所謂「中產階級（ミドルクラス）」に屬する人々である。前期的商人（資本家）も若干見受けられるが、彼等は前者の一割にも滿たない。

〔C〕鐵工業者自身の、鐵工業に從事する以前の職業は、彼等の父と同じく、鐵工業者（全體の半數を占む）、職人及製造業者、農民、及び自由業であつた。この場合にも前期的性格をもつた商人、投機業者等も見られぬ事はないが、彼等とて矢張中產階級の一割にも及び得なかつたのである。

次に、この結論をバイニングの其と比較して見よう。彼によれば、ペンシルヴェニアの鐵工業者の出身階級は、第一に少數のイギリス貴族階級、第二には商人であり、略〻出資を行ふに止まるもの、第三には數的に多數に上る「下層階級」特に、鍛冶工、書記、銀工等の職人層、最後にヨーマンを擧げ、其も多數を數ふるとしてゐる(1)。之と筆者の其とは、分類方法は多少異るが、結論は大差ないと云つてよからう。分類方法の差は、寧ろ問題意識そのものゝ差から來るものであらう。

(1) 「社會經濟史學」十四の一、五〇頁。

扨、我々は多數の煩雜な表の檢討を終へて、今は再び、最初提起した問題に歸らう。

アメリカ資本主義の基幹產業である鐵工業について云へば、

(一) アメリカ鐵工業は「中產的生產者層」によつて擔はれたものであるか。

(二) アメリカ鐵工業の少くとも或部分は、「前期的資本」が範疇的に轉化したものではなかつたか。

この間に對する解答は、既に本頁上段に與へられてゐる。筆者の使用した資料に即して云ふ限り――この點は強調されねばならぬ――、アメリカ鐵工業は、その擔ひ手を、決して流通行程から利潤を抽出して止まぬ、彼の前期的資本家にではなく、疑ひもなく決定的に、健康な「中產階級（ミドルクラス）」――農村や都市の小生產者（就中鐵工業

者)、農民、自由業者等――に於て、主體的なものとして見出したのである。のみならず、かゝる階級がプロテスタンティズムの擔ひ手であり、ニュー・イングランドやフロンティアがプロテスタンティズムの地盤であつた事實(工場分布との關係)と思ひ合せるならば、上述の結論は決して偶然的な獨斷論ではないのである。又第四節にも詳細に論じた如く、アメリカ鐵工業が、農業と如何に堅く結付いてゐたか、又農業(農村)、從つて國内市場と堅く、深く結合してゐる事によつて、如何に後年の素晴しい發展をなし得たか――こゝにアメリカ資本主義の型が打出されてゐる――といふ事實(獨立、南北兩戰爭を契機として、軍需と農具需要に應ずる飛躍的發展は忘れられてはならぬ事であるが)を今一度想起するならば、我々は斯學の開拓者、かのアダム・スミスと共に

「かゝる製造業は農業の末裔である。」

とその性格を規定出來るのである。

終に繰返し云ふならば、右の結論は、筆者の研究方法の不備、未熟なるを除けば、調査對象の絶對的不足(特に時代を遡る程著しい)、希望事項の無記載によつて、かなり制約をうけた事は事實である。その意味でこの結論は、極めて相對的である事を、筆者は强調せざるを得ない。(一九四九年七月六日稿)

「附記」

本稿は屢々引用した社会經濟史学十四ノ一所載の鈴木圭介氏「合衆國初期の經濟政策」なる論文は同氏著「アメリカ經濟史研究序説」(日本評論社)に第二論文として收錄されてゐる。

イーヴンスン著

「アメリカ炭礦業史」

高村象平

ここに紹介しようとする Howard N. Eavenson, The First Century and A Quarter of American Coal Industry. (Pittsburgh, PA. 1942.) は題して「アメリカ炭礦業百二十五年史」といふが、八折判七百餘頁の紙幅に收めるところは㈠約千三百の未刊既刊の諸資料の中から一七五八――一八八五年の合衆國各州における炭礦業關係の記錄を拔萃集錄した本文と、㈡右年間の石炭の生産及び輸送に關する八十餘の詳細な統計表とを、主内容とし、これに附錄三篇、附圖大小十四葉を添ふものである。即ち研究書といふよりはアメリカ炭礦業史料集と稱すべきものである。著者の自序によれば、これ等資料の蒐集に八年の歲月をかけたといふが、この大著を私家版行された著者の勞を多とせざるを得ない。

著者はいふ「往時の調査報告書乃至統計には缺陷多く、一八三〇年に始まる聯邦の石炭調査も不完全であつて、眞に依據し得る數字は一八八〇年に至つて初めて作成されたといつて過言ではない。しかもこの時期以前の炭礦業者の間には、自己の出炭實績の公表を嫌ふ傾向が强かつた」と。これを讀んで、何處でも類似の現象は存するものとの感が深い。植民地時代以來、獨立後においてすらも潤澤な薪炭を以て主要燃料としたアメリカで、炭礦業の發達がをくれたのは當然のことであつた。從つて著者が合衆國出炭推定量として州別に提示する統計(pp. 482―5)は、一八〇〇年を起點とせざるを得なかつた。しかもその數字は從來發表されて來たものとかなりの開きがあるが、著者はこれを以てしても尙實際の出炭量より下廻るものとしてゐる。ともあれここにはその一部分――十年毎の合衆國出炭總量(無煙炭と瀝青炭との合計量)を掲げて讀者の參考に資する。(單位、米噸＝二〇〇〇封度)大ざつぱにいつて出炭量は十年毎に略々倍加してゐることが知られよう。

ここには轉載を省略したが、この期間に惹起した三〇年代、五〇年代、七〇年代の恐慌に際して出炭量は殆んど減退を示してゐない。高々兩三年間横這ひの姿であつてその後再び上昇に轉じてゐる。尙この統計は 1 bushel ＝ 80 lbs, 25 bu. ＝ 2000 lbs ＝ 1 net ton. を單位としてゐるが、當初イギリス本國及びノーヴァ・スコーシァから石炭を輸入した東部沿岸諸地では、一八三〇年頃まで謂ゆるロンドン・チャルドロン(1 chaldron ＝36 bushels ＝ c. 2880 lbs 即ちニュキャッスル・チャルドロンの半量)乃至ピクトゥ(ノーヴァ・スコーシァ)チャルドロン(＝ 345c lbs.)を計量單位として使用してゐた。(イギリス